

持続可能な農業を目指して

自然農法をウガンダと日本で実践することによって、生産者にも消費者にも笑顔を届けたい。

株式会社クリスタル

代表取締役社長 きのしたまさよし
木下正義



企画担当 かとうめい
加藤芽依



コロナ禍で大変な時だからこそ

新型コロナウイルスが世界的に影響を及ぼす中、ウガンダ共和国でもロックダウンが発令され、国民の生活や経済に大きな影響が出ている。私たちも、2020年5月のウガンダ渡航が中止となり、今度こそはと予定していた本年3月の渡航も早々と中止にした。同国を訪れることもかなわない今、電話やWEBを介して現地とのやり取りを続ける以外にない。現状で私たちにできることは契約農園生産者の生活の基盤であるコーヒー豆の輸入を止めないこと。また、新たな挑戦としてスタートさせたコーヒー豆以外の生産者が育てた同国産バナラビーンズやカカオ豆、ドライフルーツなどの輸入を継続していくことだ。

当社もこのコロナ禍での運営は言うまでもなく大変厳しいが、これまで以上に消費者の健康に対する意識が高まっており、薬剤に依存しない自然のサイクルで育てた当社契約農園のウガ



コーヒー豆を運ぶ女性

ンダコーヒーだけは好調である。ウガンダからのコーヒー豆は予定日より3カ月遅れ、2020年12月28日に入港した。本来は年に1度の輸入だが、今年4月中旬にも新たなコーヒー豆が入

港する。コーヒー豆以外の農産物も昨年8月に商品化を実現したことで、少量ではあるが輸入を継続できている。

このような苦境にあって思い出す光景がある。24年前に初めてウガンダで見た、内戦によって国や故郷を追われた180万人以上に上る難民の姿だ。そこから国民一丸となり今のウガンダ共和国を築いた強さを思い起こすと、改めてそこで暮らす人々に助けられていることに気付かされる。

ストレスフリーな生活体験を

6年前から当社は岐阜県大垣市上石津町に約1万坪の「くりすたるファーム」を所有している。ジャーマンカモミールの栽培から始めて、今では地元生産者と共に11種類の農産物を栽培するまでになった。特に自然農法で栽培するジャーマンカモミールは、コロナ禍の中で需要が高まっており、作付けを3倍に拡大した。しかし、農業で雇用を生み出すだけでは本当の意味での地方創生(元気)とは言えない。やはり、人と人との交流が不可欠だと考え、地元自治体の協力も得ながら検温などの徹底した対策を講じた上で、自社農園を開放してジャーマンカモミール摘み体験や里芋の収穫イベントを実施することにした。東京や名古屋、京都など都会からの参加者の中には、日頃自宅から出られずストレスをためている人もいる。土の上を裸足で走り回る子どもたちや、地元生産者と談笑し